

# Onomichi Kesennuma

# 絆

# 気仙沼訪問



# 気仙沼訪問 報告書①

2011年8月28日(日) しまなみ音楽フェス～絆～から二カ月経った10月25、26日で気仙沼のファミリーに会いに行ってきました。  
メンバーは。

## 池永憲彦

パラリンピックアスリート佐藤真海ちゃんの縁で震災前から、気仙沼に行った事があり、安婆山から見た景色が地元尾道にそっくりな事に驚く。今回の震災で気仙沼と尾道の本当の意味での姉妹都市になる絵が頭に浮かび、親友の青山が推進リーダーの尾道JC事業に協力。尾道JCの人達の熱い心に感銘を受け、自分の単独の行動にも絆を背負う事に決める。



## さとし

カズのジャンクルーズ時代の後期に活躍してくれたギタリスト。  
自分で復興ライブを企画したり、自分に出来る事で動いてる中、何か手伝えることはないかとカズに電話してきて、今回の気仙沼行きが決まる。



## 森田直幸

人気上昇中の俳優。尾道を舞台にしたNHK朝ドラ「てっぺん」で鉄兄役を務めた縁でカズと兄弟の契りを交わす。何事にも積極的で、低姿勢で、謙虚だが演技力は天才である。3歳から芸能界に入り、NHK朝ドラの役名で出た俳優のレコードフォルダ。だがしかし、新しい「歌」の才能が開花する。芯のある声に音域の広さが尋常ではない。しまなみ音楽フェスでは初めてボーカルとしてステージに立つ。



## 久岡公一郎

(株)東京ドーム 秘書室長

カズとは東京広島県人会で知り合いになるが、いつの間にか意気投合。  
ものすごく熱い人で、魅力たっぷりの人。  
まさか本当に一緒に来てくれると思わなくてびっくりした。同じO型。



## 三和大介

広島で活動中の歌手。久岡さんのご友人で、今回広島からわざわざ来ていただきました。面白い人で、いい歌を歌っておられました。歌唱力がすごくて、むしろ演歌の方がうまいかも。久岡さんは「なぜ自分の歌でこの歌唱力にならない！」って言ってました(笑)



2011年10月25日(火) 早朝6:30東京を出発

眠すぎて記憶があまりないですが、直幸、さとしと京王線下高井戸駅で待ち合わせ。

さとしの車で三人で向う。

さとしと直は初対面。でもすぐに仲良くなる。

気仙沼に向う途中の「福島」の看板を見て、以前行ったビップパレットふくしまの避難所や、猪苗代湖の避難所で尾道ラーメンの炊き出しをして事を思い出し、胸が苦しくなる。

天気は曇り。少しの緊張感もありながら、やはり車での長旅は楽しいもの。車の中で気仙沼の人の事や色んな事を話す。  
ゆっくり行っても8時間くらいで気仙沼に到着する。



# 気仙沼訪問 報告書 震災の跡



震災後の4月5日に一度気仙沼を訪れてから半年・・・  
テレビの放送も段々少なくなり、情報不足のまま訪れた気仙沼。  
やはり、震災の傷跡は大きく「変わらないまま」というのが、正直な感想。実際には街の瓦礫は大部分処理されていたが、海沿いの場所は整備はされていても、とても住める状態ではない。  
寒いくらいの気候だったのに、まだ津波の匂いは残ったまま。  
夏はどのくらいひどかったのだろうか？  
そして、驚いたのが地盤沈下。水没と言っていいほどで、家の土地が水たまりになっていて、その中に魚が泳いでたくらいた。土地としての復活にはまだまだ時間がかかりそうだ。  
また一つ驚いたのが、写真左の積み上げられた人工堤防。黒い堤防の真ん中までもう海水が来ているのである。

もう一度地震が来たら・・・と想像してしまうくらいすぐ傍に迫っている。

ここは気仙沼の市場の隣。とても重要な場所である。

私以外の二人は実際に被災地へ来たのが初めてという事もあり、終始無口だった。それぞれが心で受け止めるのには少々時間がかかった。

そのまま三人は佐藤由美子さんに会いにキングスガーデンへ。久しぶりの再会の喜びを味わう。

震災よりもずっと前に一度気仙沼に来た時はこんな関係になれるなんて思ってもなかった。もう家族みたいである。

私は東京からもう一人大事なお客様をお呼びしていたので、気仙沼駅にお迎えに行く。

(株)東京ドームの久岡室長だ。久岡さんは友人であり、歌手である三和大介さんを連れてきてくださった。

三和さんは現在広島で活動しておられるので、なんと広島から

来てくれたのだ。佐藤由美子さん、キングスガーデン本部長の山崎さんと、5人でまずは暗くならないうちに気仙沼の現状を見て回る。今度は久岡さん、三和さんが息をのみ込む。船がありえない場所までながされていたり、想像を遥かに超えた景色だからだ。

佐藤由美子さんも実際に家を流されてしまった一人だ。真ん中の地盤沈下してる写真は、由美子さんの家だった場所だ。「トイレだけ残っちゃったよ」と笑いながら言う由美子さんは、丁寧に今の気仙沼の現状を教えてくれた。サンドイッチマンが逃げたという安婆山まで登り、そこから気仙沼を眺める。「こうしてみたら、まだ景色普通でしょ？

あそこらへんはもう機能してないのよ」  
相変わらず地元の尾道にそっくりな景色に広島出身の久岡さんも驚いていた。



車を走らせていたら、まるでジープで山に来たように車がガクンガクン動く。道路を盛り上げて作っているが、足場がとても悪い。信号機もないので、警察が手信号をしている。茨城とか、あちこちの警察が応援に来ているようだ。港も無残な姿になっていた。震災前に来た時はあれほど活気にあふれていた街だったのに。そう思い出しながら景色を眺めていたら、由美子さんが船を指し、「あれは広島江田島から貸して頂いてる船なのよ」と教えてくれた。気仙沼は津波により7隻所有していた船は3隻が流失し所在不明、4隻が陸に打ち上げられたため、船の運航ができなくなったとの事、旅客船航路は復活したが、フェリーがないため支援物資や生活用品等の運搬が不便で、島の復興を進めていくためにフェリーはなくてはならないものである、江田島にとっても感謝しているそうです。



気仙沼の港に「江田島」と書いてあるフェリーが走っているのはなんだか考え深く、ここでもまた絆を感じました。「ドリームのうちみ」は、気仙沼市の沖合い7.5kmにある大島（東北地方最大の有人島・人口約3300人）と気仙沼市を結ぶ定期航路便として1日8往復し、離島復興のための手助けをしています。



しまなみ音楽フェスで気仙沼のアーティストとして歌ってくれた新野真理さんは、この施設の屋上から救助ヘリで助けられたそうです。この周りは一切の建物がやられてしまっていました。寒い夜に屋上で救助を待つ時間はどれだけ恐ろしかった事か。昔被災地に初めて行った時に一緒にいった佐藤真海ちゃんのお母様は言った。「地震はそこまで怖くないのよ。津波が怖い。」津波に縁がない私にとっては、聞きなれない言葉だったので、そのすさまじさに圧倒された。お母様もまた、家が被災し、真海ちゃんと6日間連絡が取れなかったのである。

それぞれの想いを抱え、一行はキングスガーデンに到着する。キングスガーデンとは、ケアハウス・グループホーム・特別養護老人ホーム・障害者支援施設等を運営し、デイサービス・訪問看護・訪問介護・訪問入浴など充実した福祉サービスを提供している社会福祉法人だ。理事長は佐藤春子さんと、佐藤由美子さんは春子さんの娘さんになる。そのキングスガーデンの一階でなんと、鍋パーティで歓迎会をやってくださるという事。

## 気仙沼訪問 報告書 復興LIVE

しまなみ音楽フェスに来て下さった気仙沼市議会議長の臼井さんも来てくださり、50人くらいの気仙沼の人が集まってくださったのだ。そして由美子さんは挨拶して、我々を紹介してくださった。

その中でこの言葉が印象だった。

「私達はもう頑張りました。もうそろそろ楽しんでもいいんじゃないと思って皆様にお集まり頂き、ささやかですが、鍋を用意させて頂きました。今日はLIVEもして下さるので、楽しんで、明日からまた頑張りましょう」から会は始まった。会場の入り口にはしまなみ音楽フェスの時の「絆」の旗を飾ってくださった。



そして、まずは私が挨拶し、今日のメンバーを紹介した。中々緊張しない私もこの日はかりは緊張した。自分が本当にいい時間を作るのか・真剣に話を聞いて下さる人達。一体どれだけの辛い想いをされた事か、皆さんの前に立っただけで、心が動いているのがよくわかった。





まずは、会場でDVDを流す。なんと、しまなみ音楽フェスの時のダイジェストDVDを作って下さり、皆さんに見せて下さったのだ。この気遣いがとても嬉しかった。乾杯の音頭で会は始まり、熱々の鍋が目の前に。お腹すいていたので、食べまくった。直幸とさとしはカツオの美味しさに驚いていた。そうしてるうちにLIVEの始まり。



最初は三和大介さん！

三和さんはとても辛い過去をお持ちの方だった。小学生の時に父様が亡くなり、兄弟が続けて亡くなり、38歳の時にお母様が亡くなり、誰もいなくなった。その時に、自分も死のうとするが、そんな勇気もなく、おもいきって夢だった歌手になろうと上京した。その中から「生きて」という曲を届けて下さいました。とても心に響く歌だった。

三和さんは自身のブログでは『テレビからの情報を見る限りでは未だガレキ処理、被災者の安定も順調に進んでいない状況下で、ましてメジャー歌手でもない私が行って歌が何の役に立つのか…不安で押しつぶされそうだと綴っておられたが、聴いてくださったお客さんは「三和さんのおっしゃった悲しすぎる時は涙も出ないという言葉がとても共感出来ました」と、想い込めた歌はちゃんと届いていた。



次は池永憲彦。私のLIVEです。まず一曲目はここで歌いたかった曲「涙そうそう」ありがとうを込めて歌いました。

そして、ステージにギタリストさとしを迎え、サウンドもいい感じに！さとしは元気良く挨拶し、最高のギタープレイを見せてくれた。彼のギターには心がある。彼のプレイに惚れてバンドに誘った事を思い出すくらい、笑顔もいいし、楽しい時間になった。そして、NHK朝ドラのてっぺんのテーマ曲を演奏し、森田直幸の登場だ。彼は挨拶だけでって話だったが、そうはいかない。気仙沼にはてっぺんを見ていた人がかなり多く、鉄兄の登場はとても喜ばれた。

せっかくだからと、『栄光の掛け橋』を歌ってもらった。いきなり振った直幸はびっくりしていたが、それでもちゃんと歌いきった。「わからん所はラララでいいから」って言ったら本当にラララって歌っていた(笑)

彼の声は特殊で、俳優だけにしておくのはもったいないくらいいい声をしているし、キーの幅も広い。心に届く声をしている。きっといつか何かやるに違いない。

彼はまだ20歳。この歳で自分の意志でここまで付いてきて自分の足で歩き、経験した事はとても立派だと思う。真っすぐな心で、行動力があって、引力もある。どんな大人になるか今後楽しみだ。

気仙沼の人との出会いは彼の人生にとっても大きなものになるだろう。





ダラダラLIVEしても「あれ」なので、さっと切り上げたら想像しなかったアンコール。しかも「babyちゃんやって！！」という声。BABYちゃんとは、私がジャンクルーズというバンド時代にバンドコンテストで優勝して、デビューのきっかけになった曲だ。両手を上げ、右、左に振るダンス付きの曲である。もうみんなは立ちあがり、しかも、なんと気仙沼ダンサーが左右に来てくれる。(女性二人)

やっぱりこの曲はすごい。横浜開港祭で5000人を総立ちさせたくらい力がある曲で、なぜか笑顔になれる曲で、バンド時代はこの曲をやる時間が大好きだった。またこの気仙沼でも笑顔の花を咲かせる事が出来るなんて、メンバーにも教えてあげたい。最後はみんなが立ちあがり、踊ってくれた。ものすごく嬉しかった瞬間だった！



大盛り上がりで終わった後は、今度はサプライズが!! 気仙沼の海の男達が、気仙沼の歌を歌ってくれました！代表を務めて下さったのは気仙沼市で水産加工会社の代表取締役を務める春日雄一さん。とても面白い方で、もう一人の海の男ダイジさんと共にステージから、気仙沼の重鎮さん呼び出す。「途中省略 私はマグロ、カツオを買い付け、東京、広島、名古屋、大阪に卸している業者であります。それには小売というのがございまして、小売りの社長がいらっしゃいますので是非こちらへどうぞ！それを全国に流通させる社長がおられます。臼井さんどうぞ！船は船長よりも偉い船頭というのがございまして、その船頭の息子様がおられます。親分！どうぞ！」

そしてみんなで立ちあがり、気仙沼の歌を歌う。力強い歌声。いままでこんな感動を味わった事があっただろうか・・尾道には尾道の歌がないので、気仙沼の歌をみんなで歌ってる姿を衝撃的だった。前に出て来て歌って下さったのは皆さん大きな会社の社長さんばかり。我々に届けて下さったのももちろんあると思うけどもそれ以上に、「俺達これから頑張ろうぜ！今日からまた頑張ろうぜ！」という、想いが伝わり、心が震えた。



こんな楽しい時間が待ってるなんて想像もしてなかったので、本当に来て良かったと実感。人が人と心で繋がり、笑い合い助け合い、一緒に歩いていく。こんな輪に自分も参加させてもらった事を心から嬉しく思った。

それから数日後、由美子さんから連絡があり、教えてくれた。

「実はね、あの中には津波で息子さんを亡くされたご夫妻がいてね。旦那さんから電話あって、震災以降奥さんが楽しそうに笑った顔を初めて見たって言ってくれたのよ。あの会やって良かったって実感出来ました。」





会が終わった後は撮影会。てっぱん鉄兄の人気はすごい！彼も自分の将来について悩んでいた時期だったが、これだけ人に夢を与える事の出来る仕事。いまだ続く「てっぱん効果」をしみじみと感じたみたいだ。

「最後みんなばつと騒いでたでしょう？東北の人はね。人みしりが多いから最初は心開かないけど、一度心開いたら仲良くなるのが早いよ」

この時間を私達は生涯忘れないだろう。



## 気仙沼訪問 報告書 番外編 人生に乾杯を！



会が終わった後にキングスガーデンの山崎本部長が「この後一杯行くか！」と飲み連れて行ってくださった。山崎さんは石原軍団にいてもおかしくないくらいの男前だ。海の男達には「親分」と呼ばれ親しまれている。男気あるカッコいい大人で、カズブログも毎日見て下さってるようだ。（意外でびっくりした）先ほどの春日社長や、ダイジさんはさとしと大盛り上がりで、カラオケもやったが、このお店も、震災の被害に合い、最近ようやく営業を始めたばかり。最後には春日社長、を含め、みんなで肩を組み、コーヒーカラーの『人生に乾杯を！』を熱唱した。春日さんの力強い声と今日の日にぴったりの歌詞にまた感動。『乾杯しよう～♪ 乾杯しよう～♪ 乾杯しよう～♪』のサビの部分でみんなで乾杯する。みんな笑顔で、ダイジさんもみんなこの歌詞を噛みしめて、心を込めて乾杯した。この歌を聴くと涙がこみ上げてくる程忘れられない時間だった。

### 人生に乾杯を

ああ 広い海 目の前に潮風立ちつくす 目を伏せず 蟹気楼焼きつけて  
みんなで乾杯しよう 乾杯しよう 乾杯しよう 青春がぶかぶかと泡になり はじけ飛ばす  
今日の日を忘れない それぞれに抱きしめて 強くなる 俺達は 人生を手に入れる

最後に乾杯しよう 乾杯しよう 乾杯しよう 胸の奥 秘めた事今夜なら 言えるかな  
時には叫び合い はしゃぎ合い 競い合い 裏切りも少しだけ 人生はちゃんぽんさ  
必ず乾杯しよう 乾杯しよう 乾杯しよう この次に会うときは 指をさしからかおう  
いつの日か夕焼けの 帰り道 眩しげに 振り返る 我が道に 人生に乾杯を！

# 気仙沼訪問 報告書 気仙沼市場

冷える東北の朝。実は昨日ダイジさんが市場に連れて行ってくれる事になり、僕ら大喜び。しゃき！っと起きて着替える。外は異常に寒い。一同は眠いままゆらゆらと歩いていたが、その寒さにすっきり目が覚めたみたいだ。キングスガーデンから車で市場に連れていってもらうが、そこは驚きの活気だった。由美子さん曰く、以前はもっと人がいっぱい活気がすごかったが、それでもある程度整備されて、段々と戻ってきたみたいだ。でも、気仙沼は加工技術が有名な街。巨大冷凍庫や工場が全て流された為、生魚のやり取りしかまだ出来ないそうだ。



気仙沼港は生のカツオの水揚げ全国一を誇る。県や市、気仙沼漁協は例年6月中旬に始まったカツオの水揚げを目標に、地盤沈下した岸壁の整備や水揚げの設備の復旧を進めてきた。10月は戻りカツオでカツオが一番美味しい時期。業者はこの左のカツオの切り口を見て美味しさを判断する。なんと、この宣伝となる一番美味しいと言われるカツオをプレゼントしていただいたのだ！朝ごはんが楽しみすぎてお腹が鳴りっぱなしの三人であった。



「津波はあそこまで来たんだぞ。」と、指を差して教えてくださった春日さん。春日社長は震災で会社や工場を津波で流され、10億円の損害だったそうだ。そんな事を感じさせない市場での仕事っぷりと器の大きさが印象的。

「実際にはな、まだなんも復興してないんだよ。全部津波でやられてしまってあの場所に行ったら涙しか出てこねえけど、泣いたってしょうがねえ。俺達はやるしかないんだよ。必ず復興すっからな」

よく被災地に行くと逆に元気をもらおうと言うが、本当にしみじみと感じた。この市場のすぐ横からずっと後ろはまったく変わらないままで無残な姿だった。でも、この気仙沼の人達の魂は「必ず復興する」という確信がもてる言葉ばかりだった。また春日さんの言葉を聞きながらあの「人生に乾杯を」の歌詞が浮かぶ。

## 朝ごはん♪

市場から帰ってきて待ってたのは、美味しそうな朝ご飯。至れり尽くせりで恐縮だったが、今回は思いっきり気仙沼を味わおう。気仙沼の素晴らしさを改めて知るにもいい機会だったからだ。これからはこの方達とのお付き合いは長くさせて頂くつもりなので、いっぱい返していく人生の良い目標が出来た。そんな事を思いながら食べるご飯はいつも以上に美味しい。カツオは全員絶叫するくらい美味しかった！たぶんマグロの大トロより美味しいと思う。大トロのしつこさもないし、コクがあるけど、味に深みがある。驚きの味だった。これはここに来なきゃ味わえない！



# 気仙沼訪問 報告書 気仙沼商会 高橋正樹社長



左は(株)東京ドーム久岡室長。今回大企業の方に気仙沼に足を運んで頂いた事はとても良かった。やはり、音楽だけというよりは、実際に今後に繋げて行ける方をお連れするのはとても大きな事だった。どう繋がるのかは考えていなかったが、長いお付き合いになる上で、少しでも同じ気持ちを持った方がいてくれるのは自分にとってもポテンシャルがあがる事だ。久岡さんは平日の仕事の合間に来て下さり、次の日の早朝に東京に戻った。そこで、最後にお会い出来たのは、気仙沼の燃料業者さんである高橋正樹(たかはしまさき・48歳)さん。気仙沼商会の社長で、実は2008年の佐藤真海ちゃんの北京パラリンピック壮行会でお会いすることが出来てからずっと年賀状のやり取りをしていた。思ってもみない再会だったが、とても不思議な気分だった。

高橋社長はカツオ漁船の為に必要な所有していた5つのタンクは全て流されてしまったそうだ。自らが被災しながらも、港を復旧させるために先頭切って復興支援活動で動き出した方。

気仙沼は水産業がみんな繋がっていて、どれか一つでもなかったら、商売は出来ない。だから、みんなで立ちあがらないと、何も出来ないから、真っ先に立ちあがったそうだ。早稲田駅伝学生のスタッフブログに高橋正樹さんへのインタビューが載っていたので、ここでも紹介させていただきます。とても興味深い内容でした。

## インタビュー

Q. 東日本大震災から9カ月経過した今、私たちに一体何が出来るのか？

・震災直後から同じような質問を受けるが、具体的なプランを提案してもらえないとわからない。  
具体的なメニューを何個か提示してもらって、こちらで必要かどうかを判断したい。(物資・金額・人数なども含め)

Q. 現地(気仙沼)の復興は進んでいるか？

・復興は進んでいない。進んでいるのはあくまで復旧。気仙沼は地盤が75cm下がってしまった。これが解決しない限り、建物も立てられない。

Q. 風評被害はあるか？

・気仙沼に限っては特にはない。

Q. 復興への一歩として、現地へ観光客を招致しているが、実際の所は？

・気仙沼に関してはもう少し先。宿泊施設が流されてしまったので、まだ泊まれるところがない。建設業者は順番待ちで、すぐに着工してもらうというわけにはいかない。WAVOCのボランティアは廃校を使用して宿泊してもらっている。

Q. 今被災地で問題なことは？

・仮設住宅における孤独者。ざっくばらんに仮設住宅を割り振ってしまうので、震災以前のコミュニティは消え、隣の仮設住宅でさえ、だれが住んでいるのかわからない状態。自治会長を決め、表札作戦などを行っているが効果は薄い。

プライバシー等の問題で、行政が居住者名簿を公表しないことが原因の一つである。

・被災者の中でも特に子どもに対する支援活動が不足している。学校の統合、友達の被災地外への引越しなので寂しさを感じている状態。早稲田駅伝では親子ランやキッズラン等のイベントもあるので、何か東京の子どもから被災地の子どもに対するイベントは出来ないのか？

Q. 復興支援活動を行っていくうえで大事なことは？

・被災者・被災地に対して関心を持ち続けて欲しいが、自分自身が元気に生活を送ってほしい。被災者は“普通”があると安心する。

Q. 早大生に対して何か言いたいことは？

・テレビ等のマスコミで報道されるより、現地の状況は酷い。ぜひ一度被災地を訪れてほしい。

Q. 早稲田駅伝学生運営スタッフに対してご意見は？

・学生という身分をもっと活かすべき。

企業に直接乗り込むくらいの勢いがあっていい。君たちは悪いことをしているのではないのだから。早稲田の約57万人という校友数をもっと活かすべき。現役学生に「先輩!!ひと肌脱いでください。」という言葉には、校友も弱はず。

Q. 早稲田駅伝に対して何かご意見は？

・来年は開催場所を変えて岩手ランとかはどうかな(笑)？

被災者同士の絆を深めることはもとより、被災地の人と被災地外の人との絆を深める機会になり、継続した支援になるのでは？

また壊滅状態から復興した場所を走ってもらいたい気持ちもある。それと同時に、震災から1年以上経過しても、依然として復興が進んでいない所もあると思うので、ランナーにその現状も見てもらいたい。

[早稲田駅伝学生運営スタッフブログ](http://blog.zaq.ne.jp/waseda-ekiden2011/)

<http://blog.zaq.ne.jp/waseda-ekiden2011/>

# 気仙沼訪問 報告書 気仙沼復興商店街



以前に佐藤真海ちゃん(気仙沼出身パラリンピックアスリート)と北海道の石見沢市の東光中学校で教育講演をした時の縁で、石見沢市のお祭りで集まった義捐金15万円を、講演のご縁で真海ちゃんの地元の気仙沼へという事で受け取った。その義捐金を渡しに行ってきたが、もうすぐ、気仙沼復興商店街が出来るらしい。仮設店舗数が53店舗と全国でも珍しい多さだという事で、しまなみ音楽フェスで集まった義捐金も、ここのフラッグを作るのに活用してくれるとの事。石見沢市から頂いた義捐金は、ここの「cadokko」(かどっこ)というお店で、被災後バラバラになり、校庭や公園を仮設住宅に取られてしまった子供たちに、習い事や遊び場所を提供しようという企画で使われるとの事だ。

## NPO法人気仙沼復興商店街 代表理事 村上力男さんインタビュー ～日経レストラン～



村上力男 あさひ鮎社長

1941年、気仙沼市で生まれる。

気仙沼市南町にあさひ鮎を開業。70年、株式会社あさひ鮎を設立、代表取締役任就任。88年に出店した一関店のほか、古川店、仙台店、仙台駅前店を展開する。

現在、本店(気仙沼市)は休業中

写真＝阿部勝弥

気仙沼の私の店は、東日本大震災直後の津波によって2階まで浸水しました。幸い建物自体は残りましたが、多くの調理道具が流されてしまい、営業再開が難しい状況です。現在、気仙沼市の被災した商店街の経営者とともに、仮設店舗を立ち上げるプロジェクトに取り組んでいます。7月11日にNPO法人「気仙沼復興商店街」に取り組んでいます。震災後すぐは、気仙沼では、もう商売は無理だという気持ちでした。同じ商店街の仲間には、

仙台の方へ引っ越そうと言う人もいました。だいたい皆、そういう後ろ向きな気持ちだったと思います。そのうちに、いくつかのテレビ局が取材に来ました。商店街の2代目、3代目の若者がマイクを向けられて、「俺はこの南町に生まれ育って、この町が好きだ。これからこの町でやっていく」と話したんです。それをきっかけに、避難所に身を寄せていた商店街の仲間たちにも「よし、やろうか」という気持ちが生まれたんです。

私も若者たちの言葉を聞いて、自分の店がどうこう言っている場合ではない、若者たちと新たな南町を作ろうと、腹をくくりました。あさひ鮎本店は全盛期には2億3000万円の年商がありました。ところが震災の前には、それが半分以下に落ち込んでいました。気仙沼の商店街は、もうだいぶ前から元気がありません。企業も人口も随分減りました。商店街を活性化させるには、外部からお客を呼べる仕組みを作らなくてはなりません。大きな犠牲を払った我々は、この震災を新しい町作りのためのチャンスに変えなければならないのです。

現在、その復興プランを検討するために、東北工業大学工学部の今西肇教授をはじめとした識者や学生さんたちと勉強会を実施しています。やはり我々の商店街の復興は、我々の思いを盛り込まなくてはダメなんです。ですから気仙沼市の復興計画が決まる前に、我々のプランを伝えて反映させてもらいます。

震災後は、気仙沼以外にあるあさひ鮎の4つの支店もすべてが休業に追い込まれました。その後再開しましたが、営業時間を4時間短縮し、さらに店員は以前の半分の人数でやっています。そんな状態でも、売り上げは去年より多いんです。仙台駅の支店は30坪であさひ鮎では一番小さい店ですが、月商は1500万～1800万円で5つの店の中で最も多い。店を大きくして、多くのスタッフで運営することが売り上げに結びつくと思っていましたが、違うのです。仮設店舗では効率重視の商売を目指します。

全国の地方都市でも、震災前の気仙沼と同じような状況にある商店街は多いと思います。気仙沼市の取り組みが、そうした小さい町の商店街が持続的に発展するためのモデルケースになればいいと思います。また復興という面では、多くの被災地の先行事例として参考にしてもらえるようにしたいと思います



<帆前掛けとは> 気仙沼で見つけた尾道との類似店

## 尾道帆布×気仙沼帆布



尾道には船の帆を使ったグッズのお店「尾道帆布」があって、幅広い層に支持されている。帆布商品はとても珍しいグッズのはずだが、やはり同じ港町。気仙沼でもまた、帆布のグッズが復興グッズとして販売されていたのである。気仙沼の帆掛けは、室町時代より、漁師さんが古くなった船の帆を切って、腰に巻いたことに由来すると言われていいます。その帆前掛けは、港町気仙沼には大切な、無くてはならない仕事着だ。

今回の震災で、多くの仕事場が、シート工場も縫製工場も津波で流された。この震災と津波で、職場を失った職人の皆さんが、気仙沼の復興を信じて集まり、デザインから縫製までその技術で何か出来ないかと、小さな工房から始まったそうだ。

帆掛けには、「新浜町」「尾崎」など、**尾道にもある地名**が書かれていた。ここに書かれている街は、もうこの震災被害で無くなってしまったそうだ。でも、こうしてここに刻む事によって永遠に残していこうという気持ちからこの帆掛けが生まれたとの事。尾道と同じ地名が書いてある事で、リアルに津波の恐ろしさを感じる。



もしここに尾道の町の地名が書いてあったら・・・と思うと胸が苦しくなる。しかし、大事なのは悲しむ事じゃなくて立ちあがる為に心を寄りそう事。そして、復興のお手伝いをする事。この心が込められた商品を教えてあげる事だ。とは言え、商品はやっぱり商品力。ここにある商品はかなり可愛いしお洒落なのである。店長さんとも色々お話させていただいたが、震災から時間が経って、自衛隊や、若い人や色んな人が町を出ていったみたいで、その事で余計に不安になったそうだ。みんなまだまだ全然復興どころか、復旧にも満たない事を教えてくれた。このお店も由美子さんに連れて行っていただいたのだが、また心に残る事を言っていた。

「おかみさんが人にそうゆう事を話すの初めて見ました。東北の人って言うか震災に合った人は、自分の辛い事とかあまり言わないのよ。みんな辛いんだから。でもこうして、外から来てくれたりしたら話してくれるんだね。私も今日そんな事あったなんて、初めて知ったもの」



# 気仙沼訪問 報告書 最後に

気仙沼はまさに、海の恵にあふれた美しい港町でした。

豊かな海の恵みで世界にも知られる気仙沼になったのです。しかし、今回の震災で津波は大切なものを沢山奪っていきました。僕が今回訪れて一番思った事は、それでもこの地で生きる為に海と共に生きる事を大事にしてる人が多いという事。市場に行っても活気あふれる海の男達がかっこよくて、終始憧れの眼差しで見ました。

今回はなんと、「被災地に行って太って帰った」というあるまじき事になりました。それ程、気仙沼の人達は思いっきりおもてなしをしてくれました。自分の事でも大変な状況の中、美味しい物をいっぱい食べさせて下さり、気仙沼の町の良さ、現状を教えてくださいました。昼ごはんはデイサービスで呼んだお寿司屋さんが握ったお寿司をごちそうしてくれました。そのお寿司屋さんは、お店が流されてしまった後、ボランティアでお寿司を握ってあげたりしてたのを由美子さんが、お仕事で施設に呼んだそうです。沢山の悲しみがあった後には人の温かみが残ったというか、我々の日常では中々感じる事の出来ない大切な事を今回の一泊二日で沢山教えられました。

キングスガーデンの他の高齢者施設に行った時のおばあちゃんの言葉も忘れられません。「私はね。戦争で沢山の悲しい想いをした。今回また、津波で悲しい想いをしたよ。人生は色々な苦しい事がある。でも負けるんじゃないよ！頑張るんだよ！」ってうっすら涙を浮かべて手を握ってくれました。僕らに頑張れなんて、本当に感激しました。

今回佐藤由美子さんと山崎さんには抱えきれないくらい、優しさを頂きました。気仙沼の良さを知ってくれる事が何より一番嬉しいと。そして、これから復興していく姿をずっと見ててねという言葉ももらいました。

今回の同志達。久岡さん、三和さん、さとし、直幸。このメンバーで行けた事を嬉しく思います。その後に尾道青年会議所で復興委員会が設立され、本格的に気仙沼と共に歩いていく事になりました。委員長、副委員長は僕の友達でものごくハートのある熱い人間だと言う事を知っているので、安心しました。市議員の宇根本さんも本気で考えて下さっています。

小さな事でも、現実動き始めています。一人一人が出来る事は小さな事かもしれないけど、集まれば大きなものになると思います。僕は気仙沼に行って俺は完全復興するまでずっとこの人達と共に生きる事を決めました。

お互い思いやりながら心を寄せ、愛情の受け渡し。

お互いにエールを送りながら一緒に歩きたい。

世界が絶賛した東北の魂を目の前で見ることが出来ました。この感動を伝え、そして僕らの子供の世代に渡したい。

これから作られる日本の歴史の大きな1ページには、もっともっと沢山の人の気持ちが必要です。

個人的な報告なので乱文は多々ありますが、おもいっきり気持ちを込めました。この感動が少しでも伝わり、お役に立てたら嬉しいです。

池永 憲彦

